



sousei akita

曹青秋田

秋田名「佛」 ～9教区・鳳来院(桜田元康副会長師寮寺)の佛様～



一年を振り返って

会長 鮎川 義寛



昨年の四月に会長に就任して、間もなく一年が過ぎようとしております。この一年間、会の運営に当たることができましたのも、会員の皆さまや県内御寺院様のご協力とご指導があったからこそと感謝申し上げます。

昨年七月の秋田県内各地の豪雨災害では、県内三カ所のボランティアセンターを介しての活動や、義援募金活動の呼びかけ、十一月にはシャランティ国際ボランティア会様主催で源正寺様や秋

田市内二カ所を会場に「まるっと落語会」が開催され、協賛しました。「久しぶりに笑った。」という方もおられ、心のケアの必要性を感じました。また、本年元日の能登半島地震では、青年会として春のお彼岸の時期に合わせて、義援募金活動の呼びかけを行いました。県内での活動にご協力いただきました会員、御寺院の皆さま誠にありがとうございました。今後ありがとうございます。今後も、私たちにできることは何かを考え、支援活動を検討していきたいと思っております。

研修会は、七月の弁道会では、月宗寺御住職袴田俊英老師、恩徳寺御住職岩館裕章老師、秋田大学大学院医学系研究科助教ヨシキムフォン ロザリン様をお招きし「誰かのために」祈りのつどいから考える」のテーマのもと、パネルディスカッションを行います。

した。十一月の随聞会では、元曹洞宗国際センター所長藤田一照老師をお招きし「坐禅と身心の調う道」と題して、ポディワークも織り交ぜてご講義いただき、随聞会終了後に一般の方を対象とした「坐禅 de Night」も開催しました。二月の住職学研修では「様々な立場にある人を知ろう」のテーマのもと、秋田刑務所様の参観、勝平寺様を会場に介護労働安定センター柴田泰子様をお招きして「高齢者、視覚・聴覚障がい疑似体験」を行いました。様々な人がつながる場、楽しく学べる研修になるよう、次の一年も精一杯努めていきたいと思えます。

会員の皆さま、県内御寺院様には、今後とも更なるご指導、ご協力賜われますようお願い申し上げます。



令和五年度

随聞会 ずいもんえ

十一月二十一日、「秋田温泉さしみ」にて令和五年度随聞会が開催された。今回は「坐禅と身心の調う道」と題し、元・曹洞宗国際センター所長の藤田一照老師にお出で頂いた。当会では以前にも師をお招きした事があり、筆者が参加体験を記している(『曹青秋田』八十四号参照)。それから六年近くが経過し、師の身心へのアプローチも更に多様化していた。冒頭、NHKの「家族に乾杯」で高橋一生さんが突然やって来て……という一言で会場は一気に和み、参加者一人一人が「己の身体を聴く」ワークシヨップが始まった。

両手の指を一本ずつ、バイクのギアを入れるように回していき、そのうえで合掌正坐をする。合掌しながら他人を罵ったりは出来ない。という言葉にハッとさせられた。続いて参加者全員が車坐になり、お互いの手首を軽く掴んで深呼吸する。左手で吸って右手で吐く、呼吸を手から手へと伝えていくイメージである。そして互い

の頭や背中に触れあう。今の僧堂では《触れる》機会がなくなっている。との事だったが、触れて初めて得られるものが確実にあると思った。

次に、師が最近実践している『塵手水の型』を皆で行なった。力士が土俵入りの際に行なうもので、押しに弱い左半身を頑丈にする効果がある。実践した後では格段の違いがあり、皆大いに盛り上がった。だが師はこれに留まらず、深々とお辞儀するだけでも効果がある。事を発見したという。筆者もそれを実感できて大変驚いた。これらは訓練ではなく、体が本来持っている機能を開かせる「パスコード」のようなものだ、と師は表現された。まさに《寶藏自ずから開けて、受用如意ならん》(『普勸坐禅儀』)の世界であり、こういう感覚で坐禅は楽しくなる。という一言が新鮮に響いた。

師は解剖学の観点から、身体内部の筋肉(インナーマッスル)の重要性を力説した。中でも坐禅で足を組む際は勿論、歩行にも欠かせないのが「大腰筋」である。腰椎下部から骨盤にかけての部分重合するように覆っているこの筋肉は、当然ながら外から触れる事が出来ない。人体を広い部屋に

例えると、手で触れられるのがライトの当たる部分で、大腰筋は光が届かない大部分の一つといえる。背骨ばかり気にして、警策を当てて姿勢を正すのは愚の骨頂——耳の痛い指摘だった。三人一組で行なう大腰筋の鍛え方を皆で実践した(写真参照)。

当会員以外の諸老師も多く参加された今回の随聞会は、いつもにも増して有意義なものだった。映像にも収めてあるので、興味を持たれた方は、是非実践して《身心に聴いて》頂きたい。(佐々木耕志)



『コロナ明けの 坐禅会は 笑顔に溢れ』

坐禅会は 笑顔に溢れ』

十一月二十一日、『隋聞会』に引き続き藤田一照老師を坐禅指導にお招きし、秋田さしみ温泉を会場に一般の方々を対象にした坐禅会が開催されました。

会の名称は『坐禅 de Night』。ちよつと敷居の高さを感じさせる『坐禅会』という単語を避け、参加者に気軽に申し込んでもらおうと、今風のくだけた名前になったそうです。その甲斐あって会には男女問わず幅広い年齢層の参加者が集まり、しかもその中の七名ほどは人生初の坐禅体験に來られた方でした。

夜の五時半となり外も暗くなる
と、さつそく藤田老師による『坐禅 de Night』が始まりました。通常の坐禅指導だとまず足の組み方から始まり、次に法界定印のつくり方といった流れになると思いますが藤田老師は全く違いました。参加

者に坐蒲を壁際に片付けさせ、その場で大きくジャンプするように言ったのです。戸惑うようにざわつく会場でしたが、正面の藤田老師が笑顔で大きくジャンプするのに合わせて全員が飛ぶと、着地した後には老師の様に参加者の口元は綻んでいました。それから何度もジャンプが繰り返され、十回も飛ぶころには参加者の満面の笑顔が溢れておりました。こうしてほぐれた心と身体で坐禅をした参加者の方々は、終わった後でも疲れた様子などまるでなく、とてもものびのびとした顔つきでありました。

時折笑い声も聞こえたコロナ明けの坐禅会は、世の中が少しだけ戻ってきたことを感じさせつつ盛況のうちに終了したのです。

(庶務 横山智弘)



まるっと落語会

去る十一月二十七、二十八日、「まるっと落語会」が開催され、秋曹青会員数名でお手伝いさせて頂いた。これは昨夏の豪雨災害以降、秋田市社会福祉協議会(以下「社協」)が継続して行なってきた《お茶っこ会》と抱き合わせる形で開催されたものである。ここでは、筆者が参加した二日目について報告したい。

午前九時、秋田市広面の東地区コミセンに集合。社協やコミセン職員によって設営は既にほぼ済んでおり、筆者は主に椅子や机を並べた。今回の共催者であり、午後の会場となる一教区・源正寺様が音響機器を貸して下さったのみならず、準備や搬出まで御尽力頂いた。高齢者を中心に四十名ほどが集まり、ボランティアに長く携わっておられる九教区・宝昌寺様の軽妙な司会の後、落語家の桂枝太郎師匠(かつら・えだたろう。以下「師匠」)が登場された。師匠はお隣・岩手県奥州市出身で、故・桂歌丸師匠の最後の直弟子である。筆者は落語を生で聴くのは初めてだったが、来場者を適度に「イジリ」ながらも嫌な感じにならないのは、

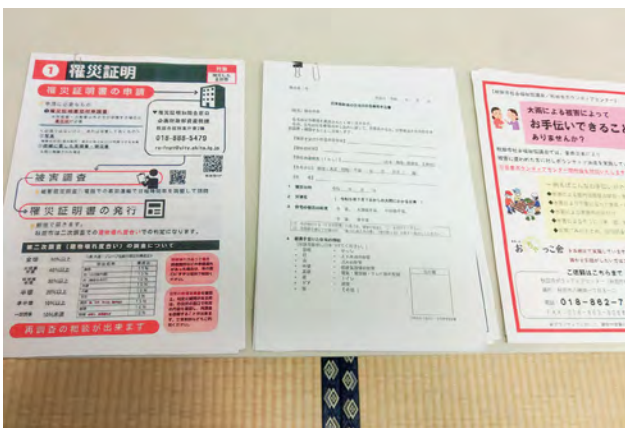
流石にプロの話芸だと実感した。落語・笑いは想像力との弁であったが、一瞬の間をおいて明るい可笑しさやブラックユーモアの苦笑いが込み上げてくるネタが何度もあり、とても面白かった。高座の後は茶話会タイムとなり、筆者は社協職員達と共にお茶や珈琲・菓子の給仕に従事した。和やかな雰囲気の中で終始盛り上がりつつあったが、被災してエアコンが壊れ、夏が終わるまで我慢した、といった声が聞こえ、あの猛暑を思うと、災害の怖さを痛感した。

正午過ぎに源正寺様へ移動し、檀家さん達や矢萩宗淳師が作ってくれた豚汁を約七十名の聴衆と共に頂いた後、本堂にて落語が始まった。筆者は楽しんで聴いただけだったが、取材した「秋田魁新報」十一月三十日付の記事(高橋さつき記者)によれば、縁日に出かけた親子を描く「初天神」・殿様と家来が狐に化かされる「狐裁き」・東日本大震災の実話を基に師匠が創作した「ユキヤナギ」であったという。古典二話は現代的な脚色も加えられており、幅広い世代が楽しめる内容だった。圧巻なのは「ユキヤナギ」で、笑いながら聴いているうちに、震災で家族全員を失った老女があのだ世で再会を果たすとい

う展開になる人情噺であった。師匠は前日には古典落語の名作「芝浜」を演じたとの事で、噺家の真打としての実力を見せつけられた。終了後の茶話会に先立ち、太平地区社協の会長の挨拶の中で、同地区の被害状況が語られ、その大きさを改めて実感した。

生憎の強い雨の中、準備や後片付けに尽力された皆様、お疲れさまでした。そしてお忙しい中おいで頂き、本物の芸を惜しみなく披露して下さいました枝太郎師匠に、心から感謝申し上げます。

(佐々木耕志)



住職学研修



去る二月二十日、住職学研修が行なわれた。今回は「様々な立場にある人を知ろう」というテーマの下、前半は秋田市川尻にある秋田刑務所を見学した。受刑者は昨春時点で約二百五十名、全て男性で平均年齢は約五十歳。六十歳以上の高齢者が二割を占め、平均刑期は約三年という。覚醒剤や窃盗関連での収監者が大多数で、累犯者も少なくない。体育館で体操をしていた数名を見かけたが、私と目が合った男性は同年代に見えた。配膳の片づけ中だった一名が、刑務官に促されて《面壁》させられていたのが印象的だった。約二十年前は全国的に収容者数がピーク期で、定員六名の雑居房に八名も入っていたというが、現在は全員が単独房であり、空き部屋も目立つ。

受刑者同士のトラブルが減り、管理が楽になったという。大浴場は縦に細長い浴槽が二つあり、管理室から全て見渡せるようになっていた。底はステンレスで鏡のようだった。入浴は数名単位で十五分と決められていて、《交談禁止》という張り紙がしてあった。また、受刑者の楽しみは「寝・食・運動」に加えて「甘い物(おやつ)」であり、いわゆる模範囚になると、支給される頻度が増えていくという。我々はほぼ全員が僧堂安居(修行)経験者だが、楽しみが共通している事に驚いた。工場での作業は残業も無理なノルマも一切ナシ、「日本一ホワイトな職場です」とユニフォームを交えて説明してくれた。常設の展示場では秋田のみならず、全国の刑務所作業製品が購入できる。興味のある方は是非御越し頂きたい。

後半は一教区・勝平寺様を会場に、公益財団法人・介護労働安定センターの柴田泰子さんを講師に迎え、高齢者・障がい者疑似体験を行った。手袋・重り・サポーター・眼鏡・耳栓をして杖をつく。体の片方が重い状態で視野は真正面だけ、横や下は全く見えない。周囲の声は内に籠り、特に高い声はほとんど聴き取れない。利き手の肘は重く曲がりにくい——このような状態で階段に遭遇すると、特に降りる際にかなりの恐怖を感じた。足が踏ん張れず、転んだらどうしよう：：という不安が高まるのだ。また、ペットボトルの蓋を開けて茶を注ぎ、紙コップを手に取って飲む——この程度の動きが大仕事となる。普段なら無意識に曲げている肘がなかなか曲がらず、やっと注ぎ終わるとドツと疲れてしまう。紙コップはツルツルして滑りやすく、持っていると感覚も弱い。高齢者の動作は決して緩慢ではなく、精一杯の結果なのだと実感した。三年前に脳腫瘍の手術を経験した柴田さんは、当初は視野が回復せず、手元に置かれた物が見えずに、「自分だけ貰えなかった」と思ったという。気持ちには昔のままでも仏壇掃除や霊供膳準備に時間がかかるようになり、「大変だったでしょう、頑張りましたね」と褒められると凄く励みになるそうだ。

安易に《分かったつもり》になるのは厳に慎まねばならないが、自分には無縁だと思っていた立場の一端を、今回の研修で身をもって体感できた。多忙な中、お時間をとって下さった方々に感謝致します。

(佐々木耕志)



寺院紹介 十七教区 大川寺

大仙市大曲に位置する長延山大川寺は、元は鎌倉時代前期の建暦二年(一一二二年)に武将の河越小太郎重房が、大曲西根に開いた真言宗大溪寺という寺院である。その大溪寺を大徹宗令門下十六哲の一人、能登總持寺十八世日山良旭大和尚が明徳二年(一三九一年)に大曲花園町に移し、師である大徹宗令大和尚を開山として勧請して曹洞宗寺院長延山大川寺へと改宗した。その後天文二十年(一五五一年)に現在地の大曲須和町に移転し今に至る。

現在の大川寺の本堂は県内最大の二重屋根の本堂であり、昭和二年に起きた火災の後、昭和九年までの歳月を要して建立されたものである。さらに本堂内上部には青森県出身の彫刻家・沢眠龍による荘嚴な彫刻が刻まれている。須弥壇には大日如来が祀っており大川寺は改宗前の真言宗の御本尊が大日如来のため、曹洞宗である現在も大日如来を御本尊としている。また大川寺の大日如来像は平安時代に作られたものであるとされ市の文化財に指定

されており、この大日如来像は昭和二年の火災の際に永平寺別院から寄贈されたものである。

本堂左側には四ヶ所の位牌堂があり一番新しい位牌堂以外は絵天井で荘嚴されている。天井の絵はいずれも地元中学校生徒達により描かれたものであるが、各位牌堂の建設年代の違いから書き手は親子三代にわたるといわれ、位牌堂二階には秋田県三十三観音霊場第十七番札所の千手観音像が祀られている。

大川寺境内には七堂伽藍以外にも弁天堂と与次郎稲荷神社があり、弁財天・与次郎稲荷の各講員の方々により護持されており、毎年五月と十月には弁財天大祭の法要、稲荷神社では毎年二月と十月に稲荷大明神のお迎えとお見送りの法要が勤修される。

その他にも大川寺では元旦の一般若祈禱から始まり、年中行事の永持講、毎週土曜日に行われる坐禅会など一年を通して様々な行事が行われており、地域の方々が檀家さんを問わずお参りに来られている。

(下釜瑞希)



龍源寺開山四百年 記念法会をおこなって

「もうすぐ開山四百年の年に
当たる」

このことを師匠と話したのは、私が晋山式を終え、住職となつて間もなくのことでした。そうした年に当たつたのであれば、それはお前の勤めなのだろう。そう言われたことを今でもしっかりと覚えております。

天井絵の修繕や、未来を見据えての防火対策。そして記念となる大法会を、昨年の六月に總持寺副貫首盛田正孝老師御來臨の下、大勢の方の参拝の中で無事に執り行うことが出来ました。

準備を進める中で師匠が遷化し、共にこの時を迎えることは出来ませんでした。師匠も納得する行事になつたらうと思っております。

「過去を敬し、現在を行じ、未来を為す」

行事の中で、何か一つ主題を持ちたいと考え、告知の中に

の言葉を入れました。

副住職時代、私は師匠の言葉やスタンスに何度も疑義をもち、幾度となくぶつかりました。

時代は違う、このやり方ではいけない。そういう思いを強く持ち、師匠の言葉に耳を貸さなかつたこともあります。

しかし、師匠の本葬を行い、そして開山四百年の準備を進める中で、いつしかこの考え方は霧消していきました。

自分はどうかやって僧侶になつたのか。多くの方がお参りし、手を合わせ、祈りを傾けるこの場所、そこを守っているこの自分は、どうやって出来上がったのか。

師匠亡き後、師匠を祖師とし、その祖師がいればこそその私を、今日誇りを持って勤める。

そしてその積み重ねが、お寺の未来を作っていく。この気持ち、今の私の原動力です。

奇しくも本年は鑿山禪師七
百回遠忌。「相承」という言葉の
重さを感じる年です。

自分にとつての相承とは何
なのか。このことを、自坊の遠
忌を勤める事で知ることが出
来ました。この時に当たつたこ
とで、自分の僧侶としての命題
に出会うこともできたと思っ
ています。

行事の簡略化が進む今日で
すが、たとえ辛くとも、世の流
れに合わずとも、行ずるべきこ
とを勤めることで、自分の未来
が出来上がっていくと私は信
じたいと思います。

(土屋泰順)



曹青秋田／第95号

発行／秋田県曹洞宗青年会

事務局／由利本荘市東由利蔵字蔵127 蔵立寺内 発行責任者／鮎川 義寛 編集責任者／佐々木耕志
秋曹青ホームページ <http://www.sousei-akita.net/>